

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

遠江国	7首	／	18首	}
相模国	3首	／	8首	
駿河国	10首	／	20首	
上総国	13首	／	19首	
常陸国	10首	／	17首	
下野国	11首	／	18首	
下総国	11首	／	22首	
信濃国	3首	／	12首	
<u>上野国</u>	<u>4首</u>	<u>／</u>	<u>12首</u>	
武蔵国	12首	／	20首	
84首／166首				

- ②昔年防人…………… 8首
- ③昔年相替防人……… 1首

合計 93首

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

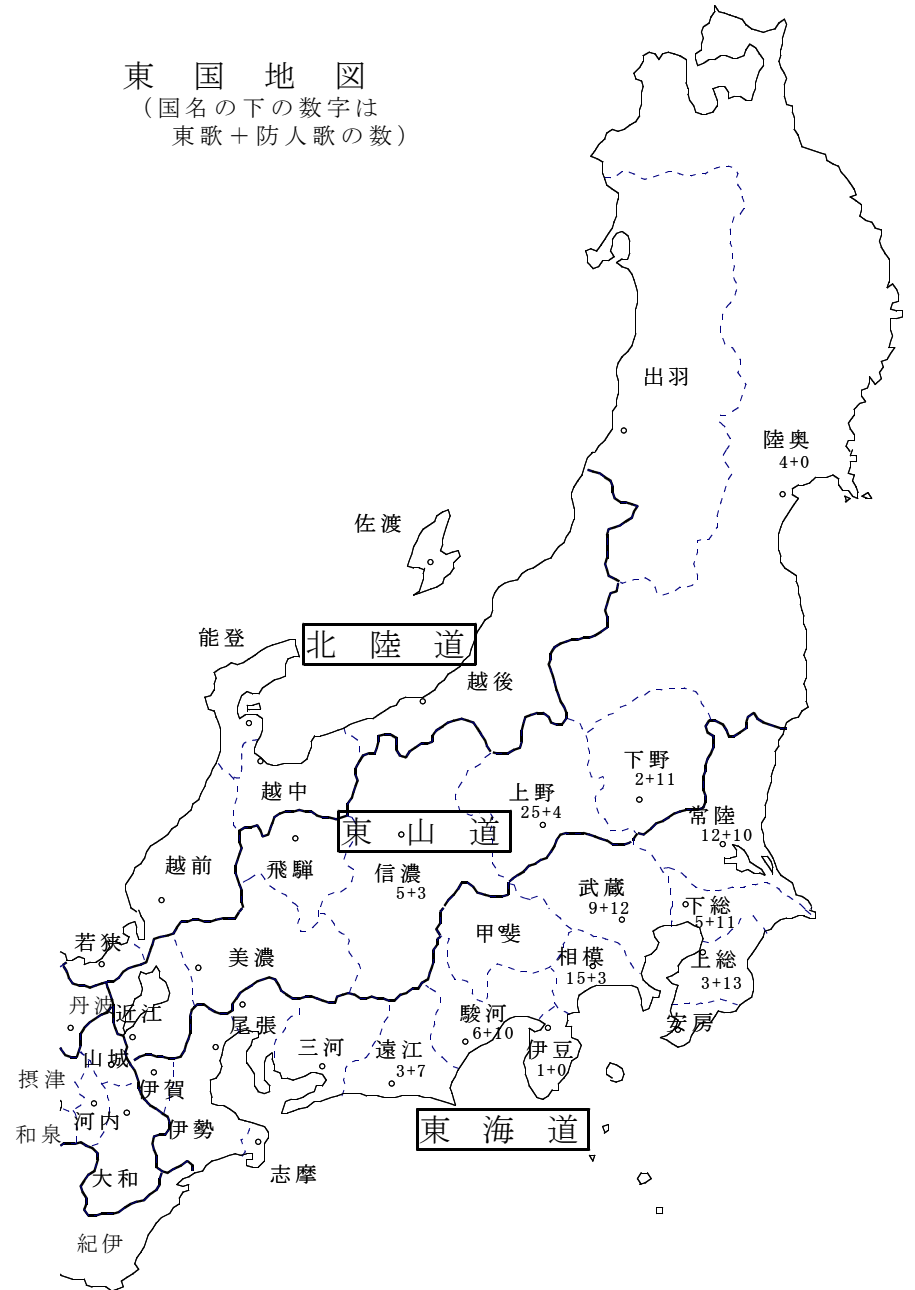
国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	} 東海道 - 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	} 東海道 } 東山道
		譬喩歌 9	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

上野国東歌

群馬県立女子大学名誉教授 北川和秀

東国地図
 (国名の下の数字は
 東歌+防人歌の数)



【碓氷】

① 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ (三四〇二) 上野東歌

② ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも (四四〇七) 上野防人歌
 右の一首は、他田部子磐前のなり。

【丹生】

③ 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは (三五六〇) 未勘国東歌

《参考》

・ 白真砂御津の埴生の色に出でて言はなくのみそ吾が恋ふらくは (二七二五)

【多胡】

④ 吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも (三四〇三) 上野東歌

《参考》

・ ……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。 ……

(多胡碑 七一年)

昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるという説を採用して命名された。

【佐野】

⑤上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（三四二〇）上野東歌

《参考》

a ……佐野の三家と定め賜ひし健守命 ……（山上碑 六八一年）

b 上野国群馬郡下賛郷高田里の三家の子孫 ……（金井沢碑 七二六年）

c 橋は あさむづの橋。長柄の橋。 ……佐野の舟橋。 ……（枕草子六四）

× d 駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮（新古今集六七一）定家

× e 苦しくも降り来る雨か三輪の崎佐野の渡りに家もあらなくに（万葉集二六五）

f 駒留めて、袖うち払ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮れ、かやうに詠みしは大

和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。これは東路の、佐野のわたりの雪の暮れに、

迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、ひと夜は泊まり給へや。（謡曲鉢木）

⑥上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも（三四一八）上野東歌

【伊香保】

・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。

・「いかほ」という語の構成は「いか（厳）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。

・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲

穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。山の名には

「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じ。

・「いか（厳）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている

状態」（『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（厳し）」「

「いかめし（厳めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。

・「いかほ」の「いか（厳）」は、この山のもつどのような性格を「いか（厳）」ととらえたのであろうか。

・山の姿
・雷の巢窟
・火山

⑦伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（三四二一）上野東歌

⑧伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）上野東歌
《参考》

a 韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（三六七〇）

b 荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」（三八九一）

⑨上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（三四二三）上野東歌

《参考》

・わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」（一〇四一）

⑩伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の躰ろまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）上野東歌

《参考》

a 虹 にじ〇東国の小児。のじと云。（『物類称呼』巻一「天地」）

* 『物類称呼』は江戸時代中期の安永四年（一七七五）にできた方言集

b のじ 虹（『群馬県邑楽郡誌』前編附録「二、方言」）大正六年（一九一七）刊

c ノジと発音するのは注者の少年の頃にも村裡には行はれた。

（土屋文明『万葉集私注』三四一四番歌の語釈）

* 土屋文明氏は、明治二十三年（一八九〇）西群馬郡上郊村保渡田生。

【利根川】

⑪利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）上野東歌

【子持山】

⑫子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四）未勘国東歌

【沢渡】

⑬左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）未勘国東歌

【その他】

⑭上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五）上野東歌

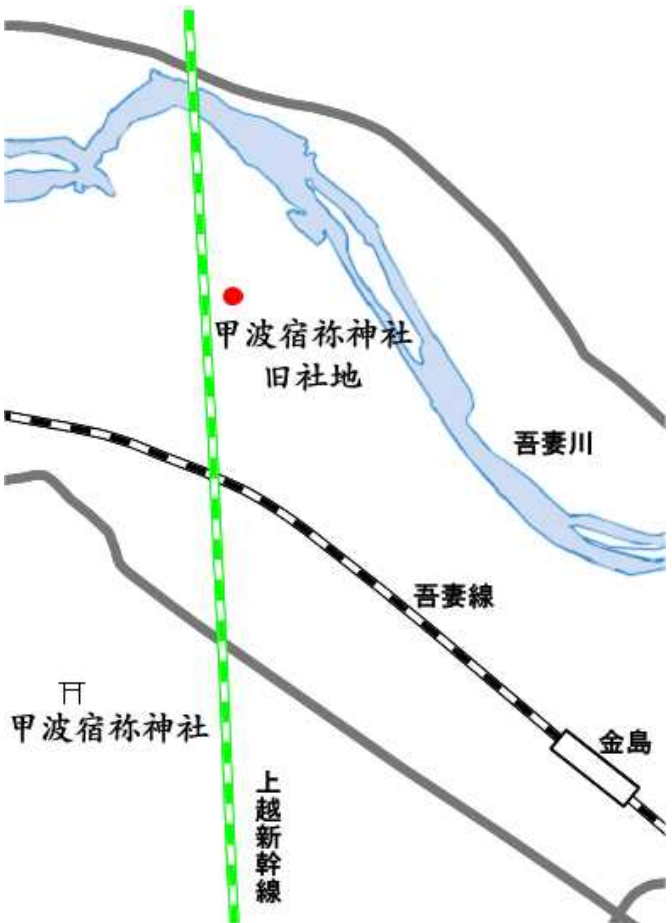
⑮上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（同或本）上野東歌

⑩ 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）上野東歌

《参考》

a 入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬる吾にな絶えそね（三三七八）武蔵東歌

b 西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん
光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、
その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。…名に高きかほ
やが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては佛すらなくなりしうへ、
また其地さへぞうせはてたる。（奈佐勝阜『山吹日記』天明六年1786五月十三日条）
* 「うのとしのわざはひ」は天明三年の浅間山の大噴火によつてもたらされた災害



⑪ 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ益れ（三四一七）上野東歌

【上野国防人歌】

⑫ 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）

右の一首は、助丁上毛野牛甘のなり。

⑬ わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ（四四〇五）

右の一首は、朝倉益人のなり。

⑭ わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（四四〇六）

右の一首は、大伴部節麻呂のなり。

⑮ ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（四四〇七）【碓氷】に既出

右の一首は、他田部子磐前のなり。